

2019（令和1）年度 東京大学 入試問題 第1問 解答例

一 生物の営みは、主に単調な物質を除いて無秩序に向かう世界では、秩序ある形と複雑性を生み出す点で、特殊であるということ。

* 傍線部アの主題は「生物の営みは～」であり、「生命は～」ではない。

* 「生物の営みは」「自然界では」「ある意味」「例外的である」を適切に置換する。

二 生命は、静的な秩序と無形の無秩序の間で、偶発的に諸要素の相互作用が起き、次々に違うパターンとして現れるということ。

* 傍線部イ「何か複雑で動的な現象」という名詞句の、意味上の主題は「生命は～」である。よって、解答ではこれを「生命は～、現れるということ。」と適切に構文化する。

* 「何か＝偶発の」「複雑＝要素の相互作用」「動的＝次々に違って生みだされる」などの適切な置換がポイント。「揺らぎ」など、この本文中では比喩として用いられている表現は、使ってはならない。

三 科学が混沌とした世界を解明し、新たな秩序を確立し、次々に正しい予測と判断ができれば、人類には大変喜ばしいということ。

* 「それは」の指示対象「世界の姿は固定され、新たな「形」がどんどん生まれている」の適切な置換を、傍線部ウの主題として解答化する。

* 「大きな福音」という比喩自体の適切な置換も忘れないこと

四 二つの大きく異なる状態の中間に現れる複雑性の非常に増大した特殊な状態が「カオスの縁」であり、生命現象が該当する。科学という人間の知的な営みもこれと似て、真実と混沌との中間の確定的でない世界で既知を増やし、様々な秩序・形態を生じるということ。（一二〇字）

* 「本文全体の趣旨を踏まえて」、まず、全体の前提論となる「カオスの縁」の定義を説明し、次いで、前半の要旨である「生命現象」について、設問一・二で解答済みであるので簡潔に触れ、最後に後半の趣旨と傍線部エ自体の内容説明を、「確定的でない世界」と「知的な存在としての人間の営み」の意義を中心として解答する。

五 a 貢献 b 代替 c 細菌